

ダンジョンに出会いを求めるのは間違っているだろうか ベルザ  
ストーリー

時月闇

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

もしもじいちゃんとかばあちゃんがヘラとゼウスだったらのお話です！

後ベルをチートに見たから書きました！

初投稿なので暖かい目で見てくださいと嬉しいです！

投稿は最近不定期気味です、

感想とか変な所があれば教えてくださいと大変助かります！

後駄文です！

# 目次

プロローグ	英雄の卵	1
ベルはオラリオに来て悩んでいた		4
酒場での戦闘		8
ベルの休日		14
モンスターファイリア編前編		18
モンスターファイリア編中編		22
モンスターファイリア編後編		27

## プロローグ

## 英雄の卵

「おー、これがワシの孫か！」

「そうだよ、名前はねベルクラネルだよ父さん」

「ワシに孫がウワーン」

「父さん泣き過ぎだよ」

「そうだよみつともない！」

「泣かずにいられずにいられないよ『ヘラリス』ウワーン」

「だからうるさいよ『ゼウスト』」

「そうだこのベルに何かあげなければな！」

「何しようかね〜？」

「そうだ！ワシラの恩恵を与えるのはどうじゃ？」

「無理よ。恩恵はファミリアの証、一つだけしか刻めないわよ」

「そうじゃなー？そうだいいことを思いついた！」

「なんなのさ？」

「加護くらいは与えられるじゃろ？それをベルに与えるのはどうじゃ？」

「そうね、私は魔法が得意だから魔法に良い加護を与えるは」

「ワシはステイタスの加護を与えよう！」

「父さん何言ってるんだよ」

「まあ見てればわかるわい！」

そう言っってヘラリスとゼウストはベルに手をがざし

「我らの名において命ずるこの赤子にヘラの加護を『ゼウスの加護』  
を与える！」

詠唱が終わり、かざした手には光が集まり一つの光はムラサキ色のは光、もう一つの光は白色でベルの身体の中に溶け込んで行く。

「これでベルに加護はついたのう！」

「着いたわね、」

「ベルだったらいつか黒龍を倒してくれるかも！」

「そうね多分ベルは未来オラリオに行くはず、だから私達はそれを見守るだけね」

「そうじゃなく」

そう言つてゼウストは家に帰つて行きヘラリスは少し残つてベルのほっぺたをツンツンしていた。

あれから十五年

「ベル忘れ物はないかい？」

「ないよおじいちゃん！」

「本当に行つてしまふだな」

「うん！行つて英雄になつてハーレムを作つてくるよ！」

「そうじゃあその域じゃあ！」

「うん！それじゃあ行つてきます！」

「行つてこいベルよたまには帰つてくるのじゃぞー！」

「わかつたよ！おじいちゃん！じゃあねー」

そう言つて村を出る時ある人に呼び止められた。

「本当に行くのかいベル」

「うん行つてくるよ！ヘラおばちゃん」

「誰がヘラおばちゃんだつて！」

ヘラのげんこつがベルの頭に当たつた。

ベルは頭を抑えながら

「ヘラ姉ちゃん魔法の事教えてくれありがとうございます！」  
ベルは満面の笑みでヘラリスに言う

「余り無理するんじゃないよ心配するからね」

「うん！わかったよじゃあねーヘラ姉ちゃん！」

ベルはヘラリスと別れを告げて村をでていった。

ベルは歩いて行き途中ゴブリンとかワイバーンと出てきたがベルの相手にはならなかった。そしてついに

「ここがオラリオかー！」

ベルはオラリオの街の前に立ち期待を膨らませ街に入っていく！

そしてここからベルの英雄伝が始まる。

ベルはオラリオに来て悩んでいた

「うーんオラリオに来たもののどうしよっかー？」

ベルは考えながら街を歩いていく。

やっぱりまずファミリアに入った方がいいのかなー？まあファミリアは後で決めるとして、まず僕の力がどこまで通用するか確かめたいなー。まずは、ダンジョンに行こう無理しない程度に。

ベルは街を歩きながらダンジョンに向かっていった。

「うーん一階層じゃあ相手にならないな」

そう言いつつベルは下に行く道を歩いて行った。

「五階層までできたけどゴブリンとかは多くなってきたけどつまらないなー」

ベルは落ちている魔石を拾いながら歩いていると奥からモンスターの雄叫びが聞こえた。

何だあの雄叫び、ようやく相手になるやつが出てきたな！よし向こうに行こう。あ、魔石拾い忘れた！まあいいかあの位の魔石。さて次はどんなやつかな。

ベルはそう思いながら進むと、そこにはミノタウロスがいた。

「ミノタウロスだ！やったーこいつはまだ戦ったことないんだよね！」

ベルは腰からナイフを取り出しミノタウロスに突っ込んで行った。

ミノタウロスはそれに気づいたのか持っている武器でベルを叩き潰すかのように腕を上げベル目掛けて武器を振るった。

ベルは振るった武器をかわして背後に回りナイフでミノタウロスの背中を斬る。

「硬いなこのミノタウロス並みのナイフじゃあ無理か！」

ベルはそう呟き背中にある一つの剣を抜く。

???  
SIDE

早くしないと死人が出てしまう。それはダメ早く。

「テンペスト『エリアル』」

走りながらそう呟くと、彼女の走るスピードが上がる。

『ヴォオオン』

見つけた！お願い誰も死んでないで。

彼女は走りミノタウロスの所に着くと、彼女はある人の強さに驚き見惚れていた。

#### ベルSIDE

ベルは背中に携えた剣を抜きミノタウロスに再度斬りかかる。

はあー！ベルが大振りに剣を振りミノタウロスの腕を斬る。

ミノタウロスは、少し怯みまた武器を大振りに振りベルに叩きかける。

ベルはそれを鮮やかにかわしつつミノタウロスに斬りかかる。そこから腕、膝、背中、そして顔を目掛け飛び両目を斬りつける。

ミノタウロスは視界を失い武器を闇雲に振るっていた。

まあそろそろ疲れてきたからもう終わりにしよう。

ベルはミノタウロスから少し遠ざかり詠唱を始める。

「闇は光を飲み闇は光を喰らう『シャドウアマメント！』」

闇の光が回りに現れベルの身体に溶け込んでいく。

ベルの姿はまるで魔王のような姿で黒いオーラを身に纏い、その闇は剣にも纏わりつく。そしてベルは叫んだ！

『ヘルスラッシュ!!』

剣を大きく振りミノタウロスを斬る！それはまさに魔王の嘲笑いを思わせる技だった。ミノタウロスは真つ二つになりミノタウロスは、消えそこには魔石の代わりにミノタウロスの角が落ちていた。ベルはそれを拾い帰ろうとした瞬間そこにいた彼女に気がついた。

え！何！誰！凄く綺麗だ！／／／／

ベルは顔を俯きブツブツと呟いていた。



???  
SIDE

凄いな彼、あの剣技にあの力どうやって身にしたんだろう？彼何者なんだろう気になるな？どこのファミリアなんだろう。

彼女はベルをずーと見ていた。

ベルSIDE

「えーと、どうしたんですか？」

「ううん、君の剣技がすごいなーと思ってたの。ねえどうやってそれを身に付けたの？」

「えーと、この技はおじいちゃんに習いました。」

「後その魔法は？」

「この魔法は、おばあちゃんに習いました。」

「ふーんそうなんだねー」

顔近いが近いよこの人恥ずかしい／／／

ベルは顔が真っ赤になり湯気が出ていた。

「あ、もしかしてミノタウロス横取りしちゃいましたか！ごめんなさい！ダンジョンではモンスターの横取りはダメだというのに本当にごめんなさい！」

ベルは頭を下げ彼女に謝罪した。

「大丈夫元々こっちのファミリアの不手際でこうなったから。だけど倒してくれてありがとう？」

彼女は感謝の言葉を述べたが何故か疑問形だった。

「ありがとうございます！」

ベルは再び頭を下げる。

「それでは僕帰りますのでそれじゃあこれで」

ベルはそう彼女に挨拶をして上に繋がる道を歩き出すと彼女は彼を呼び止めた。

「ねえ君の名前なんて言うの？」

「ベルクラネルです！」

「私はアイズヴァレンシユタインだよ」

「わかりました！ヴァレンシユタインさん！」

「アイズ、みんなはそう呼ぶ」

「じゃあ、アイズさんで！」

ベルはまた顔が赤くなる。

「うんじゃあまたね？」

「はい！まだどこかで！」

ベルはそう言つて上に行く道を歩いていった。

ダンジョンを出て宿までの道を歩いていると

「あの〜？これ落ちましたよ。」

彼女は一つの魔石を彼に差し出した。

「え、あ、すいません。ありがとうございます」

「いえ、夕方までダンジョンに潜っていたんですか？」

「はい！もつと強くなりたいので！」

ベルは拳をぎゅっと握らながら言う

「よかつたらうちのお店に来ませんか？後私はシルといいます！」

「シルさんですねわかりました！行けたら行かせていただきます！」

「はい！いつでもお持ちしていますよ！」

そういつてベルは宿に向かって歩いていった。

## 酒場での戦闘

「うーん？この後どうしよっかな宿に着いたけどこれから寝るのはなー。」

ベルはベットに座りながら考えていた。

そういえばシルさんにレストランに来てくださって言われていたな。よし今日の夜ご飯は、シルさんが働いているレストランにしよう！

宿のベットから立ち上がり、ドアを開け階段を降りレストランに向かっていった。

### 酒場着

「いらっしやいませ！あ、ベルさん来てくれたんですね！」

「はい！暇だったので来ちゃいました！」

「私の誘いは暇つぶしようだったんですか！もう」

シルは少し怒り気味でベルに言う

「ごめんなさい！決してそんなことは、」

あわつてながらベルは、シルに謝る

「大丈夫ですよ！これで私のお給金が上がりますから！ではご案内します！」

シルは笑いながらベルを案内していく。

カウンターの席に着きメニュー表を見ると値段に驚いていた。

高いな大丈夫かな僕の所持金、魔石とか売ってないから今は村から貰ったお金で生活してるけどやっぱり、ファミリアに入らないとまづいかな。

ベルは考えながらメニュー表を見てると

「あんたがシルを誘った冒険者ねえ〜」

「はい！シルさんに誘われて来ました！」

「そうかい！あんた、見た目とは違って相当強いね。」

「僕はまだまだです、これでも未熟者なので。」

「まあいいわ！私はここで女将をやってるんだよろしくな！」

「はい！僕はベルクラネルです」

「いい返事だ！ウチは少し高いが味は保証付きだよ！」

「それじゃあ、えーと、この『魚のムニエル焼き』をください！」

「あいよ！魚のムニエル焼き入ったよりユー！」

「分かりました、母さん。」

ベルが料理を頼むと女将さんがそれをリユーと言うエルフの彼女に言い料理が作られる。

「酒はいるかいベル！」

「いえ飲めないので普通の水をください！」

「そうかわかったよ！ほら水だ、ゆくつりしていきな！」

「はい！ありがとうございます！」

女将はそれを告げ厨房の方に消えていった。

「ベルさんどうですウチの母さんは！」

隣からシルさんが喋りかけてきた。

「えーと、いい人だと思います！」

「そうでしょう！ベルさんいっぱい食べてってくださいね！」

シルは笑顔でベルに言う

ボンとベルの顔が真っ赤になった。

「団体様のお客様が来店しましたニャー！」

「はあー疲れた。飯が早く食いてー！」

「うるさいよ！ベート！でも分からなくない！」

「同意してどうすんのテイオナ！」

「だっってお腹空いてるだもー！ね、アイズ！」

「うん、私も空いてる」

「まあ皆んな席に着いてや！では皆んな遠征お疲れや！皆んなたらふく食ってやー！」

と皆豪快な宴が始まった。

スゴイなーどこのファミリアなんだろう？

ベルは考えているとシルが

「ロキファミアですよロキ様がウチの常連さんなんです！」

「そうだったんですか！」

「はい！あ、ベルさん魚のムニエル焼きできたみたいですよ。」

シルは厨房に走って行き魚のムニエル焼きを持ってきてくれた。

「ありがとうございます！うーわ美味そうだな！」

「何たって自慢の料理達ですから！」

シルは自信有り気に言う

「シルこっちを手伝ってくれ！」

女将がサボっていたシルを少し怒りながら呼びつけた。

シルは苦笑いを浮かべながら女将の方に歩いていった。

ベルは来た料理を食べているとある会話が耳に入ってくる。

「なあ、アイズ話してくれよミノタウロスの話をさー！」

「そうだよアイズ、見たんでしようミノタウロスを一撃で倒した冒険

者をさー！」

「うん、彼は一撃でミノタウロスを倒してたよ。」

「凄いなその少年ファミリアとか名前聞かなかったのかい？」

「名前はね、ベルて言ってるね丁度その人みたいな髪型で、え、ベルど

うしてそこにいるの？」

アイズが指をさした方向にベルがいた。

「彼がミノタウロスを倒した冒険者！」

ティオナは、驚きながら言う。

「あれが倒しただって！無理無理あんな負け犬倒せるわけねーだろ」

ベートは笑いながら言う

「ほんとだよ、ベートさん私近くで見てたよ」

「彼が倒したと言うのかいアイズ。」

「うん間違いないよ？」

「そうかわかったよ。」

アイズはベルの隣に行く

「ねえベルどうしてここにいるの？」

アイズが話しかけてくるとベルは、

「アイズさん！あのえーと、誘われたのでここに来ました！」

ベルは顔がまた真っ赤になり湯気が湧いていた。

そこに一人の少年が礼を言いに来た

「ベル君だったよね、この度は僕達のファミリアが逃したしまったミノタウロスの討伐に感謝する。」

少年はベルに頭を下げ礼を述べた

「いえ感謝される程のことはしていませんので気にしないでください！」

ベルはあたふたしながら礼の言葉を受け止めると

「感謝に何か贈り物をしたいのだがどこのファミリアだろうか？」

「ねえベルはどこのファミリアに入ってるの？」

アイズと少年はベルに問いをかける

「いえ感謝の贈り物は大丈夫ですよ！後ファミリアには所属していませんー！」

そのことを言うとロキファミリアが驚きの声を上げる！

「ベルはファミリアには入ってないの？」

「はい！今日来たばかりなのでファミリアには所属していません！」

「君は凄いな、申し遅れたけど僕はロキファミリア団長フィンデームと言っ」

フィン は驚きながら自己紹介をする。

「ご丁寧にも！ベルクラネルです！」

「ねえねえベル君は強いんだね！後私はティオナだよ！」

そういつているとベートが近づいて来た。

「おいテメエ！勝負しろや！負け犬」

ベートはベルに叫びながら言う

「ベート今君酔ってるね。」

エルフの女性がベートに言う

「うるせええ！俺は気に入らねーんだよこの兎がよう！」

「兎ってぼくのことですか！」

「そうだよ兎！勝負しろ！」

「はあー、分かりましたここは邪魔になるので表に出しましょう。後シルさんお金ここにおいておきますね！」

ベルは財布からお金を取り出し机に置き外にでた。

ベートそれについて行き外に出る。

「いいか兎！俺はお前を一発で倒す！」

「誰が兎ですか！僕はベルです！」

「そう呼んで欲しいならかかってきな兎！」

そしてベルとベートの勝負が始まる。

おい聞いたかレベル5のベートローガに喧嘩売った奴が出てきたてよ

まじかよ俺はベートローガにかけるね、

俺は喧嘩売ったやつにかける笑笑

周りからは賭け事の話が始まっていた

まずベートがベルに突っ込んできた。ベルはそれを横に交わす。

ベートは避けたベルの手を掴み地面に叩きつけ用とするがベルはその掴まれた腕を払いベートの背後に回る。

背後に回ったベルはそこから二撃与える。ベートは怯まず右腕後ろに振った。

ベルは振った腕をしゃがんでかわしベートの足を引つ掛け転ばす。

ベートは転びそうだったが手を地面につけアクロバティックに転ぶのをかわした。

「なかなかやりますね！ベートさん！久々ですよこんな気持ち！」

「うるせえよ兎！そんな事言ってる暇があるならかかってこい！」

「分かりました！僕は貴方を全力で倒します！」

ベルはそれを言い放つと雰囲気が変わる。

ベートは寒気を感じた

なんだよこいつ！俺は強い！あんな兎野郎にまけるはずがねえ！

ベートが瞬きをした瞬間後ろにふつとばされていた。

え、今何が起きた！ベートローガが吹っ飛ばされてる！えー！

観衆を皆驚きの声を上げる！

「ベートさんありがとうございしました！久々に本気だしました！」

ベルはベートに挨拶をして帰ろうとする。

「ちよとまてくれんか！ベルといったな、ウチのファミリアに入ってくれんか？」

ロキと思われる人がベルを呼び止め勧誘する

「いえ、僕はまだファミリアに入る気は無いのでまた声をかけてもらえると嬉しいです！」

「わかった、次あったらまたこの事言うからな！覚悟しとけや！」

ベルは軽く返事をし帰っていった。

ベートは気絶しながら団員に担がれ帰っていた。

宿に着くとベルは自問自答をしていた。

何やってるんだ僕は！ファミリアの勧誘を受けたのにそれを断り、あまつさえまた声を掛けて下さいなんてあー僕のバカ！

ベルは、そのまま自問自答をしながら眠ってしまった。



## ベルの休日

今日はどうしようか、ダンジョンに入って鍛えるのもいいけど少し休んだ方がいいよね？そうだよ、今日僕はほのぼのとするぞ。

宿の部屋の中で一人ぶつぶつと呟いてるベルは立ち上がり部屋のドアを開け宿の外に出て入った。

出たはいいもののどうしよっかな？ほのぼのすると言っても何をすればいいのか分からない、まずジャガ丸くんを買いに行こう。

一人通りを歩きながらジャガ丸くんを買いに行こう。

数分が立ち歩いていると大通りの方に出た。大通りの傍にジャガ丸くんを売っている店を見つけると、そこに向かって歩いていく。

「すいません、ジャガ丸くん一つください」

「おお、ジャガ丸くんを買ってくれるのかい？ありがとうね、はい、ジャガ丸くんだよ」

「ありがとうございます！ウワア、うまそうだな」

「また来てくれよな！」

ベルはお金を置き大通りの真ん中の噴水の近くに座りジャガ丸くんを食べる。

「やっぱり美味しいなジャガ丸くん！さて食べ終わったけど何しようかな」

ジャガ丸くんを食べ終わり考えていると、

「ベル？」

考えていると急に隣から話しかけられた。

「アイズさん！あの、えっと、こんにちは！」

ベルは慌てながらアイズに挨拶をする。

「うん、ありがとう、ベルは何をやっているの？」

「えーと今日何しようか悩んでいます、、、」

「そうなの、ならベル私と一緒に街を歩かない？」

「えー！いいんですか僕と一緒に歩いて！」

「うん、ベルと一緒に歩きたい」

「はい！ありがとうございます！」

慌てながらアイズの誘いを受けベルはアイズと一緒に街を歩いていった。

#### 数分後

ベルはアイズと街を歩き武器やポーションを見に行ったり、本日二度目のジャガ丸くんを食べながら歩いていると、

「この後私行きたい所があるのだけどベルも来てくれる?」

「はい!で、どこに行くんですかアイズさん?」

「内緒」

ベル達は街の外れの方に歩いていった。

「ここだよベル」

アイズが行きたかった場所は街の外れの城塞だった。

「どうしてここにアイズさん?」

「ここだったらベルと勝負できると思ったから?」

「勝負!あのえーと、どうしてですか?」

「どうしてベルはそんなに強くなれたのか知りたくて」

「僕は強くないです、あの人にはまだ全然届かなくて」

「あの人?」

「はい!僕のおじいちゃんです!」

「ベルは凄いね、おじいちゃんに追いつくために頑張ってるんだね」

「はい!」

「私も追いつきたい人がいるの」

「アイズさんにも?」

「うんだから私は強くなりたい。だからお願いベル、私と勝負して。」

「わかりました勝負しましょう!」

「ありがとうベル」

ベルはアイズの勝負を受けお互い後ろに後退し武器を構える。

「アイズさんこの石が落ちて来た時に勝負です!」

「うんわかった、負けない!」

「僕もです！」

石を空に投げ、石が落ちて来た。

その瞬間ベルとアイズお互い武器を構えた。

石が地面に落ちるとベルとアイズは一斉に走り出す。

ベルとアイズの剣はお互いぶつかり合った。

ぶつかり合うたび火花がちらつき、お互い笑いながら勝負を楽しんでいた。

それからぶつかり合い、お互いスタミナが少なくなって来ていた。

「やりますねアイズさん！」

「ベルもね！」

「だけどお互いスタミナがなくなって来たみたいですね」

「うん、そうだね次で決める」

「そう簡単には、負けません！」

「テンペスト『エリアル!』」

「闇は光を飲み、闇は光を食らう『シャドウアメント!』」

お互い詠唱をし、魔法を発動させる。

「行くよベル!『リルラファアガ!』」

「はい!『ヘルスラツシュ!』」

お互い技を放つと、二人ともそれをもろにくらい二人は倒れた。

「ベルは本当に強いね」

「アイズさんも強かったです」

「ありがとう」

「いえ!こちらこそありがとうございます!」

「また勝負してくれる?」

「はい!いつでもお受けしますよ!」

そういつていると辺りは夕方になっていた。

「そろそろ帰りますか?」

「うんそうだね私お腹が空いた」

「僕もです!」

ベルはアイズに手を出し立たせてあげた。

「アイズさん!そろそろ手を離して貰いたいのですが?」

「ダメ、それともベルは私と手を繋ぐのは嫌?」

アイズはベルに上目遣いをして手を離すのを拒む

「いえーむしろなんというか、ありがとうございます!」

そうして二人は手を繋ぎながら帰り、ロキファミリア前に着く。

「今日は本当にありがとうございます!」

「私もありがとうございます!」

「はい!では僕はここら辺で」

「うんまたね」

ベルはそのまま宿に向かい、アイズはファミリアの中に入っていた。

## アイズSIDE

「アイズた〜んどこに行ってたんや?うちを置いてどこ行ってた?」

「ベルと街を歩いて勝負してた」

「そんなんか、そうなんか!え、ベルとそれならうちも呼んで欲しかったなアイズたん。それよりうちを慰めてーな!誰もうちを相手してくれんのや、だからアイズたん慰めて〜!」

「嫌!」

アイズはロキの抱きつきを避け自分の部屋に帰って行った。

「ぐほー!アイズたん待ってやー!」

ロキのアイズへの叫びは聞こえる事はなかった。

## モンスターファイリア編前編

ベルは前にアイズと勝負していた街の外れの城塞で一人修行をしていた。

「はあ！そいや！せいや！そうりゃ！」

掛け声と共に木刀を振り、そこから数分たち汗をタオルで拭って帰る準備をする。

「はあく！今日の朝練は終わり！」

「はあく今日いい朝だなく、今日はいいい事あるかも！」

ベルは木刀を携えタオルを首に掛け宿に帰っていった。

### 宿に帰る途中

！  
なんか少しお腹が空いたな、あそこに売ってるリンゴを買いに行こ

リンゴを売ってる所に着くと

「リンゴ一つください！」

「はいよ坊主！坊主今日も朝練かい？」

「はい！よくわかりましたね」

「毎朝見てるんだ分らないわけないだろう」

「そうですね、今日はえらく賑わってますね朝から」

「坊主知らないのか？今日はモンスターファイリアなんだよ」

「モンスターファイリア？」

「ああ！年に一度ガネーシャファミアリアが闘技場を貸し切って、ダンジョンから持ち帰ったモンスターを観客の前で調教するのさ」

「へーそうだったんですか」

「見た事ないなら今日見に行きな！」

「はい！考えておきます！」

「おうそうか、またな坊主」

「はい！失礼します！」

リンゴ売りのおじさんから別れ、宿に走りながら帰って行った。

???  
SIDE

「ねえ〜オツタル、今日はモンスターフィリアね〜」

「はい」

「ねえ今日も彼は元気ね〜、彼私欲しいわ。彼の輝きを私の物にしたいわ〜ねえ〜オツタル私いい事考えたわ」

「何でしょう」

「モンスターフィリアのモンスター達の情報を集められるかしら」

「わかりました、少しだけお待ちよ」

「わかったわ、待ってて坊や必ず私のにしてみせるから」

ベルSIDE

「へっぷし〜」

ん？なんだ今妙な寒気が、まあいいや今日はダンジョンに潜る予定だったけどリング売りのおじさんが言っていたモンスターフィリアに少し興味があるんだけどな〜よし！今日はモンスターフィリアを見に行こう！

武器の手入れを済まして宿の外に出た。

うわ〜今日は人凄いな〜一年に一度と言われているだけはあるな  
)

ベルはそのまま大通りを歩いていると、

「おーい待つニヤンそこの白髪頭！頼みがあるニヤン！」

「え」

「あ、おはようございますニヤン」

「お、おはようございます」

「頼みはこれをおつちよこちよいのシルに渡して欲しいのニヤン」

「えっと、はい！分かりました！」

アーニヤから財布を受けとりベルはシルを探しに言った。

それから数時間後、

シルさんどこに言ったんだろう見当たらないな〜こんな探して  
るのに見当たらないなんてまさか！入れ違いに早く戻らなくちゃと

思った瞬間、

「ガオオオン!!!」

モンスターの叫び声が聞こえた。

#### アイズSIDE

「それでどないな奴やお前が狙ってるその子供つうのは？」

ロキがフードで顔を隠した人に言う、

「とても頼りなくて、少しのことで泣いてしまうでも綺麗だった。

透き通っていた。私が今までに見たこともない色をしていた。見つけたのはほんの偶然たまたま視界に入っただけ、」

とフードで顔を隠した人が言った

「どないしたん？」

「急用ができたわ」

「はあー！お前いきなり、」

「また、会いましょう」

そう言っつてフードで顔を隠した人は立ち去って行ってしまった。

「なんやあいつ、て！勘定もこつちかいなアア、どうしたアイズ？」

ロキがアイズに問うと、

「あ、いえ」

アイズはそう答えた。

アイズ達はその場から離れ街を歩いていた。

「なあーアイズあいつが言っつた奴わかるか？わいは、まったく分からへんわ」

「いえ、分かりません」

「そうかく本当に誰やろうなあ」

ロキはアイズと話していると、

「ガオオオン」

と、モンスターの叫び声が聞こえてくる

「なんや！モンスターみたいな声やで、まさかモンスターフィリアの

モンスター達が逃げたわけないやろな！」

ロキがそう言っているとアイズは剣を抜きモンスターの叫び声が出た方向に走って行った。

「はぁー、ほんまアイズたんは。うちはフィン達に伝えに行こうかな」

ロキは自分のファミリアの方向に走って行った。



## モンスターファイリア編中編

ベルSIDE

そこには龍がいた

何故ここに龍が、まさかこれも調教用だと言うのか！

ベルは龍を睨め付ける

龍はその視線を感じたのかこちらに向かつて来た

勝てるか今もっているものは木刀だけだ

ベルが身構えていると目の前に幼い少女が泣きながら歩いて来た

「お母さん！お母さん！どこにいるのー！」

「危ない！」

ベルはそう叫んだ

また守れないのか。またあの時のように見殺しにするのか。ダメ

だそれは絶対ダメだ！

ベルは詠唱を走りながら唱えた

「闇よ我を神速にせよ」

『ダークリミッタースピード』

ベルは神速の如く走り少女を助けた

少女を表通りに走らせ裏路地の龍から遠ざけた。

よかったまた見殺しにするとこころだった。さてこの龍をどうするか

ベルは龍と睨めつこの状態である。

「闇は光をくらい、闇は光を呑む」

『ダークアマメント』

闇はベルをまとい木刀にも闇が纏う。

龍は炎を吐く

ベルは町の壁を使ってかわす

そこから闇が纏った木刀で龍の腹を切る

龍はビクともしなかった

ベルは闇が纏った木刀でそのまま足腹翼を切りつけていく

龍はガクツと足をついた  
これならいける！倒せる

と、ベルが思った瞬間龍は急に灰色に変わった  
白色から灰色に変わり龍はベルを尻尾で薙ぎ払う

それをもろにくらい壁に打ち付けられた

そこからベルは立ち上がりまた斬りつけようとした

でも龍には効かなかった

その硬さはまるで鋼のような硬さだった

「色が変わってから切っても全く効かないこんな初めてだ」

そう言った瞬間龍は空に舞い上がり青白い炎ブレスをベルにめがけて放った。

ベルの服は所々焼けており倒れていた

僕は負けたのか全力を尽くしてもこの龍には勝てなかった  
最後にあの子を助けられて良かった

『諦めないで！』

誰、でも懐かしい気がする

『まだ貴方は全力を出していないわ！』

僕はもう全力を出したよ、でもあの龍は倒せなかった

『私が好きだったベルは諦めたりしないわ！』

諦めたらなんかしてないよ

『勝てるよ！私が保証するわ！だから立って』

ベルは片手を抑えつつ立ち上がる

君の声を聞いてると力が湧いてくるよ

『ありがとう／＼／ベル私が今から言う言葉を叫んで!』

わかったよ

『闇ある時光あり、絶望の时光は希望を掲げる』

『光は希望を持たせ闇を討つ』

『希望掲げたものは勝利を手にし英雄になる』

『希望は勝利を約束する』

『シャイニングウィナー!』

ベルの手には光り輝く長剣が握られておりその光は暖かく人を包み込む優しさがあつた

光り輝く長剣を握りベルは龍に向かい

『シャイニングソード!』

光り輝く長剣は光を放ち龍に向かっていった

龍はそのまま立ち尽くし光を浴びた

浴びた龍はチリとかした

ベルは疲れたのかそのまま壁に座り込む

『勝ったねベル』

うん、ありがとうございますございます君のおかげで勝てました

『ううん私はベルの力を信じたただけだよ』

何故僕にこんな力があるとわかったんですか？

『フフ、それは内緒よ』

そうですか、でもありがとうございますございます

『いいのよ、そろそろ私行かなくちや』

そうですかいつかお礼させてもらえますか？

『また近いうちにね、それじゃあまたね〜』

そういうと頭に聞こえていた声が聞こえなくなった

いつかまた会えますよね

ベルはそう思いながら立ち上がると  
「大丈夫？」

そこにはアイズがいた。

???  
SIDE

「もう大丈夫なのか」

ひとりの男性が問うと

「うんもう大丈夫だよ！」

1人の少女が答える

「彼にはなんと?」

「少し励ましの言葉をね」

「そうですか、そして彼との関係はどうなんです?」

「彼は私の好きな人かな／＼」

「ほうー、それはロマンチックですね。そろそろ仕事です戻りますよ」

「はい」

そう言っつて少女は男性についていった。

次は声じゃなくてそのまま会いに行くよベル。

## モンスターファイリア編後編

くアイズSIDEー

彼には驚かされてばかりだ。一回倒れた時は助けなくちやと思つたら光だして立ち上がり龍を倒してしまった。どうしたらそんなに強くなれるの？私のはあの光のオーラを浴たら少し懐かしい感じがした。

くベルSIDEー

いやく倒せた、なんなんだろうあれ？おばあちゃんの本にも載っていなかった。でも彼女を助けられたからいいつか！でもアイズさんになんて言えば。

「大丈夫？」

「はい大丈夫です」

「それは良かった。ねえどうしてそんなにも強いベルは？」

「僕は強くありません」

「強いよベルは」

「ありがとうございます、アイズさん」

ベルは差し伸べられたアイズの手を取り立ち上がる。路地を抜け大通りを歩き中心部に来ると後ろから叫びまくるロキが走って来た。

「アイズた~~~~ん、ガフ！」

ロキはアイズに抱きつこうと走って来たがあっさり交わされる。

「酷いなアイズたん交わすなんて！」

「今はベルが怪我をしているのだからやめて」

「おや？ベルじゃないか、なんでそんなボロボロなん？」

「あははは、少しやってしまいました」

「まあええわ、うちのところで治したる」

「いいですよ、僕は宿に帰りますから」

「ダメ、ベル」

アイズは逃げ出しそうなベルの腕を掴みロキのホームである『黄昏の館』に連れてかれる。

黄昏の館に着く。デカイなロキ様のホームは。内心少しワクワク

しているベルを連れ黄昏の館に入って行く。中に入りロキの部屋に向かわされロキの部屋に着く。

「アイズ、リヴェリア連れて来てくれ」

「わかった」

アイズはロキの部屋から出てリヴェリアを探しに行く。

「少し話をしないかベル」

「分かりました」

「ほな最初の質問はベルの生まれた場所や」

「僕は少し遠い村から来ました」

「そうか、次はどうやってそんなに強くなったんや？」

「強くはないですがお爺ちゃんに教えてもらいました」

「お爺ちゃんは何かの心得があるのか？」

「あると聞いていますがなんだったかは、忘れてしまいました」

「これで最後や、ウチのファミリアに入るきになってくれたか？」

「すみませんお断りさせてもらいます」

「そうか、まあ気が向いたらでええわその時は酒を持ってきてな」

「分かりました」

会話を終わるとドアのノックの音が聞こえる。入ってきたのはアイズとエルフの女性だった。

「初めましてだな、ベルクラネル。私の名前はリヴェリアだよろしく頼む」

「よろしくお願いします」

「ロキ、リヴェリアを連れてきたよ」

「ありがとなアイズ」

「ううん大丈夫」

「まず傷口で毒がないか調べたい上を脱いでくれないかベルクラネル」

「ベルでいいですリヴェリアさん」

ベルは紺色の服を脱ぐ。体は引き締まっております外見からは思えない体をしている。

「終わったなら少し座ってくれ」

ベルは座りリヴェリアがその前に立ち詠唱始める。

「どうやら毒はないみたいだ。服を着ていいぞベル」

「ありがとうございます」

ベルが服を着ようとした瞬間ロキはあることに気づく。なんや肩にある絵みたいなの。どこかで見たような、あ！あれは

「ベル一つええか」

「なんででしょうか？」

「その肩にある絵はなんや？」

「これはおじいちゃんとおばあちゃんがやってくれたものです」

「その絵は、嫌なんでもない気のせいみたいや」

ベルが服を着終わりアイズと少し話している。あの絵、いやあれはゼウスファミアリアとヘラファミアリアの証し。ワイが思うにベルはゼウスとヘラとの関わりがあるかもやな。

「すみませんロキ様そろそろ遅いので僕帰ります」

「あ、すまなかった。またいつでも来てや」

「分かりました」

アイズに案内をされベルはロキの部屋から出る。ロキはリヴェリアに、

「フィンを連れ来てくれリヴェリア」

「何かあるみたいだな、わかった」

リヴェリアもロキ部屋出て行きフィンの元に行く。これはとてつもないことが起きそうやな、ファルナの二個持ちのベルか。ロキは目の前の酒を取りグビグビと飲みフィンが来るのを待つ。

〜ベルSIDE〜

「ありがとうございますアイズさん」

「ううん、また来てくれる？」

「来れたら行きます」

ベルは走り出しアイズに手を振り宿に戻っていった。これからはもっと強くならきゃな。そのためには修行あるのみ！ベルは走りながら手をグーにしてそれをあげる。